

♪ 工藤篤子メールマガジン9号 2002. 5. 10 ♪ ●人はみな求めてる

こんにちは。工藤篤子です。

いつもお祈りくださり、ありがとうございます！

4月30日に無事にハンブルグに戻りました。

こちらに戻った翌朝、鳥たちの美しい歌に目覚め、窓の外の2本の大木一杯に芽生えた緑の葉を見たときは、ここはオアシスかと思いました。忙しかった日本から戻り、久々の安堵感にひたっています。

レコーディング

CDのレコーディングは、実は帰国前夜まで続きました。最後の日は録音のチェックでした。ディレクターの梅本さんとアシスタントの木村さんは、最後まで気持ちよく、一生懸命やってくださいました。あとは日本とドイツ間で編集の打ち合わせをしてゆきます。ここまで辿り着くのに大変でしたが、ここまで導いてくださった主に感謝いたします。編集が終わったら、曲順を決めて、訳詞と解説を載せるジャケットの作成を始めます。

CDの歌だけでなく、このジャケットも大切な伝道のメッセージです。お祈りください。そして梅本さんと木村さんの救いのためにも。

北浜で思ったこと (People need the Lord)

日本では、最後の40日間、大阪の、ど真ん中、ビジネス街の北浜に宿泊していました。ウィークデーはビジネスマンのうごめくコンクリート砂漠。彼らを見ると、今回のCDにも入れた「人はみな求めてる」(原題: People need the Lord)の歌詞をよく思いました。

どこへ行くのか 知らないままに
歩き続ける 人々の
笑顔の下の 悲しみは
主イエスだけが 知っている
人はみな 求めてる
闇の向こうに 光る道
主イエスこそ ただひとり
人のこころ 満たす方



日本のビジネスマン達は今、ほんとうに疲れています。この経済情勢の中、背広の中に大きな不安を抱えているに違いありません。この人たちは、砂漠の中に生きていて、魂が飢え渴いているに違いない、と思っただら、「人はみな求めている」をレコーディングした時に、泣けてきました。そして自分の録音を聴いてまた泣けました。ディレクターの梅本さんは不思議に思ったかもしれません。

今回、黒田先生が教会（IBC）を建てるにあたって、ここ北浜に霊のオアシスを作りたかった、とおっしゃった気持ちが、今、よく分かります。

人々が「主イエスこそ、ただひとり、人の心を癒し、満たす、救いの君」（二番の歌詞の最後）であることを知りますように！

IBCの皆さん、関西VIPの皆さん、主にあってがんばってください！

ところで、コンクリート砂漠の北浜は、ひっそりと静まりかえる週末にはホームレスたちがうごめき始めます。リヤカーで段ボールを運ぶ人、ゴミをあさる人、以前はビジネスマンだったであろうと思われる、ほこりにまみれたスーツを着て、たばこの吸い殻を拾い歩く人・・・これは多分5年ほど前には見られなかった光景でしょう。北浜と淀屋橋を結ぶ地下道にはホームレスの人たちが列をなして寝ています。心が痛みます。

「私はこの人たちに何をしてあげられるのだろうか？」彼らを見るたびに思うのです。

「主よ、今は歌うことで忙しい私ですけれど、時間のない中で私に何ができますか？」

ハンブルグで伝道を始めたときも、ドイツ語ができなくて思うように伝道できずに歯がゆい思いを経験しました。けれどもあの時、祈ることならできると、思い、とにかく毎日心から祈ったことを思い出しました。

そして今の私はホームレスの人々に伝道できる言語（方法と時間）を持ち合わせていないけれど、祈ることならできると！

以来、レコーディングのために垂水まで出かける日は、北浜から淀屋橋の地下道を歩きながら祈りました。そして宿泊先から北浜の地下鉄までを、日ごとに通る道を変えて、一軒一軒のビルのために祈りました。同じ北浜に生きるビジネスマンとホームレス。どちらも主を必要としている人々（People need the Lord）なのです。

ハンブルグ教会での婦人ランチオン

5月4日、わが教会での2回目の婦人ランチオンがありました。私の帰国（独）をねらって、賛美と証しを依頼されていました。当日、来訪者9名、教会員10名、計19名のなごやかな朝食会。その後、30分程の賛美と証し。

今回は、仏教徒の私が、どのようにしてキリストの救いに至ったか、ということに焦点を当てて証しをしました。ドイツ人は、今大変仏教に興味を持っているからです。例の「万引きの証し」はしませんでした。

賛美したとき心が動きました。もちろん歌う時にはいつも心が動くのですけれど、時々、大きく揺さぶられる時があります。今回はそのような、感謝で一杯の揺さぶりでした。御霊が働かれたのでしょ。たくさんの方が目に涙をいっぱいためていました。



この間、「イエス様は絶対信じない」と言ったという女性が、「どうして涙が止まらないのかわかりません。」と、ずーっと泣き続けていました。「主があなたの心に語りかけているからですよ。」と、サリーが答えました。

その後、教会員たちが、ほとんどの来訪者と信仰の話しをすることができた、と言っていました。素晴らしい伝道の場を与えてくださった主に感謝します。今回の来訪者たちが主の救いにつながるようどうぞお祈りください。

ハンブルグでの5ヶ月の生活への希望

ハンブルグに戻った一日目、「主よ、あなたとの交わりを大いにエンジョイさせてください。」と祈りました。私は本当に飢え渴いていました。日本では、私は実に hektisch（あわただしい）です。

日本は果てしなく忙しい国。夜11時になっても仕事の電話が来ます。週末も関係ありません。だから休養するけじめがつけられないのです。主に一生懸命奉仕しているという充実感もあるのですが、逆に、このリズムに巻き込まれたらワーコホーリック（仕事中毒）になって、主のご臨在から離れてしまうんじゃないかという危機感を感じました。日本では主の御手のなかにある素晴らしさをじっくり味わうということが、ほんとうに難しいなあ、と思います。

こちらでは、月に一度祈りの日を持ったり、時々、3日あるいは一週間という単位で近郊の静かな場所に祈りに行ったりしていました。そのような時を持つことによって、自分の心の状態をみことばに照らしていただいて点検したり、悔い改めさせられたり、主のご約束の確認、これまでの主の素晴らしいみ業に感動、感謝し、賛美し、喜び、とりなしの祈りをし、あとはもう主のもとにただいて幸せ・・・そのような時には聖書のみことばがあざやかに浮き立って見えてきます。主もそれをとても喜んでくださっていると確信しています。

まずは月一の祈りの日を復興させようと思っています。祈りの日を決めるときには、数ヶ月前からこの日は主とのデート日、と計画を立て、何があっても絶対動かさないようにします。そうしないと敵は、私達を神に祈らせないようにと巧みに攻撃してきますから。

スペイン(5月30日~6月6日)

今後の活動としては、5月30日~6月6日、スペインへ行ってきます。6月1日に、友人のカロリーナが結婚するからです。スペインのカセレス出身の彼女は、今コスタリカに住んでいます。そして宣教師になるべく準備をしているアメリカ人とカセレスで結婚式を挙げます。私はもちろん賛美のプレゼントをすることになっています。

そしてその翌日、6月2日には、**マドリッドの日本人集会**で証しをさせていただくことになっています。この集会は、昨年、日本で宣教するご両親と日本に住んでいたフィンランド人のハンナ・キビニエミさんが始めた集会です。長い間（18年間）、いつかマドリッドに日本人集会ができますように、と祈ってきた私にとって、この集会で証しをさせていただけることは、本当に大きな喜びです。

どうぞこのマドリッドの日本人集会の祝福ためにお祈りください。

皆様にとって、祝された素晴らしい5月でありますようお願い申し上げます。

感謝を込めて

工藤篤子